



日韓文化交流と佛教

特に『華嚴宗祖師繪傳』を中心に

Cultural and Buddhistic Relation between Japan and Korea

저자
(Authors) 成田俊治
Narita Shunji

출처
(Source) [한국종교 13](#), 1988.9, 107-114(8 pages)
[Religions of Korea 13](#), 1988.9, 107-114(8 pages)

발행처
(Publisher) [원광대학교 종교문제연구소](#)
The research institute of religions wonkwang university

URL <http://www.dbpia.co.kr/journal/articleDetail?nodeId=NODE09309273>

APA Style 成田俊治 (1988). 日韓文化交流と佛教. 한국종교, 13, 107-114

이용정보
(Accessed) 삼성현역사문화관
210.178.101.***
2020/03/23 17:50 (KST)

저작권 안내

DBpia에서 제공되는 모든 저작물의 저작권은 원저작자에게 있으며, 누리미디어는 각 저작물의 내용을 보증하거나 책임을 지지 않습니다. 그리고 DBpia에서 제공되는 저작물은 DBpia와 구독계약을 체결한 기관 소속 이용자 혹은 해당 저작물의 개별 구매자가 비영리적으로만 이용할 수 있습니다. 그러므로 이에 위반하여 DBpia에서 제공되는 저작물을 복제, 전송 등의 방법으로 무단 이용하는 경우 관련 법령에 따라 민, 형사상의 책임을 질 수 있습니다.

Copyright Information

Copyright of all literary works provided by DBpia belongs to the copyright holder(s) and Nurimedia does not guarantee contents of the literary work or assume responsibility for the same. In addition, the literary works provided by DBpia may only be used by the users affiliated to the institutions which executed a subscription agreement with DBpia or the individual purchasers of the literary work(s) for non-commercial purposes. Therefore, any person who illegally uses the literary works provided by DBpia by means of reproduction or transmission shall assume civil and criminal responsibility according to applicable laws and regulations.

日韓文化交流と佛教

—特に『華嚴宗祖師繪傳』を中心に—

成 田 俊 治*

一、

四國を海に囲まれた日本が、島國という條件の中で、韓半島・中國大陸との人的交流、文化交流によって新しい文化に接し、それを消化吸収していくことによって独自の日本文化を生み出し、また韓半島・中國大陸と日本との國家相互の交流の親疎の消長はあったにせよ、外國との交流によって日本の自我意識・對外意識も芽生え、發展したことも事實であろう。またインドで成立した佛教が東漸し、日本に流入し弘布し理解され信奉されたということは、日本の民族的思惟により濾過せられ、日本人の精神的風土によって日本独自の佛教が成立したことであり、このことはいまさら言を俟たない。

さて、佛教は6世紀半ば百濟の聖明王によって日本に伝えられたのであるが、それは公的な傳來を示すものであり、私的な傳來はそれ以前からあったことは史料によってもうかがわれ、また公的に道が開かれて以後、佛教の流入は、佛教の先進國である百濟・高麗・新羅・唐そして朝鮮・宋から續けられた。しかも佛教の傳來・流入ということは、具體的には、佛・法・僧の三寶すなわち佛像・經典・僧尼をはじめとして、その三寶を安置する伽藍、その中で行ふ儀禮・法會・學問、そして建築・彫刻・繪畫・音樂・舞踊、それらを専門職とする技術者・藝術家の人びとや人物の傳來・流入を意味する。佛教學研究をうながした經論疏の將來とその研究、信傳に記される來日僧や留學僧の活躍、正倉院に残さ

* 日本、佛教大學 教授

れる西域あるいは中國にその源がみとめられる多くの文物はそのことを示している。このような外來の思想・文化を日本の精神的土壌の中に消化吸収して生み出されたのが日本文化である。いま統一テーマである「日韓文化交流と佛教」を考えると、佛・法・僧の三寶の展開をはじめとして、さきあげた視點やそれぞれの分野において考究すべき課題や、明らかにさるべき問題が提起され得るであろうが、ここでとりあげるのは、日本中世文化の一特徴といわれる繪巻物について、とくに外國の僧を題材にしたものである。

二

ところで繪巻物は、横長の巻物に繪を描き説明の文章(詞書)を加え、右から左へと繰りひろげながら鑑賞する形式の繪畫で、その起源は中國において典籍や經典の圖解や、書卷とよばれた卷子本の繪畫に求められている。日本において9世紀後半に著わされ、その當時日本に傳わっていた典籍の状態を示す『日本國見在書目錄』に、中國の繪畫の歴史書『歷代名畫記』にのせる圖卷と同題のものが入っていることは、中國における書卷の轉寫本が日本に傳わっていたことを示している。こうした中國からの繪入りの典籍や書卷を受け入れ、それが日本独自の繪卷として成立していくのは、内容をなす物語や説話の發達、日本人の好みに合った繪畫的な表現や技法をとっていく9世紀後半から10世紀はじめにかけてであり、すなわちそれは“やまと繪”の發生といわれている。以後、多くの繪卷が作られ今日では現存作品約120種600巻、また文獻上に名を残す作品約100種400巻といわれている。とくに13~14世紀(鎌倉時代)はその最盛期といわれ、それまでの貴族趣味的な耽美的なものから、新しい時代精神を盛った寫實的なものがあらわれ、その内容も多様性をかえてくるのである。その多様性は平安末期から鎌倉初期の社會的變革によって起る社會不安、人びとの動搖などがこの時代の宗教・文化に大きな影響を與え、それが鎌倉時代の複雑な文化を生み出し多様性を加えてきたのである。その中から新しい時代

に相應しい宗教が誕生し、その宗派の祖師である宗祖の傳記を寫しその業績を宣揚するために高僧繪卷が生れ、一方では新佛教興隆に刺激されて天台・眞言・南都六宗の既成佛教も復興の氣運をみせるとともに、自派の高僧の繪卷、社寺縁起繪卷、神佛の靈驗繪卷を以て自己の佛教を弘めたのである。そこにこの時代に宗教繪卷がとくに興隆した原因があるといえよう。

三.

さて、高僧繪卷は三十數種が数えられるが、そのうち主なものは、鎌倉淨土教の法然上人繪傳、親鸞上人繪傳、一遍上人繪傳、そして日蓮上人註畫讀、高野大師行狀圖書、弘法大師行狀繪詞、聖徳太子繪傳、西行物語繪卷などであり、その他とくに注目されるのは、日本の高僧ではなく外國の僧をとりあげているものである。すなわち『東征繪傳』(鑑眞)、『華嚴宗祖師繪傳』(新羅元曉・義湘)、『淨土五祖繪傳』(曇鸞・道綽・善導・懷感・少康)、『玄奘三藏繪』、『羅什三藏繪傳』である。それぞれ作られた宗派關係や目的・意圖はあるが、そのうち興味深いのは、統一新羅の初期に活躍した元曉(617~86)と、朝鮮華嚴の基を開いた義湘(?~702)をとりあげた『華嚴宗祖師繪傳』であろう。海外の高僧傳を題材とし、またこの繪傳の詞書を作ったとする日本の華嚴宗復興につくした高山寺明恵(1173~1232)とのかかわりにおいて、さらに日韓文化交流の中でのこの繪傳のもつ意義など、この繪傳は興味ある問題を含んでいるといえよう。

さて『華嚴宗祖師繪傳』は建長2年(1250)に撰述されたと考えられている『高山寺聖教目錄』や、『看聞御記』永享5年(1433)6月16日の條に「義湘大師繪四局青丘大師繪二局」とあり、もと義湘大師繪四卷、元曉大師繪二卷が原初の形であったことが知られるが、現在では元曉繪三卷、義湘繪三卷に仕立てられており、内容も元曉繪に義湘繪の一部が錯入している。

元曉・義湘の傳記は『三國遺事』『三國史記』をはじめ元曉には塔碑が

あるが、とくに繪傳は『宋高僧傳』によっていること明らかである。繪傳の内容は、元曉と義湘の二人は修行のため唐に向うが、途中元曉は悟るところがあつて引きかえし、國內で内外のすべての經典に通じ經論の疏を著わし、その學徳世に開えたという。たまたま王妃の病いの時、金剛三昧經を講じその病をなおしたという。その經に對する注釋は金剛三昧論と名づけられ世間に流布したという。一方、義湘は唐に渡るが、善妙という美女に出會い慕われる。義湘が業を終え歸國しようとする時善妙は海中に身を投じ大竜となつて義湘の船を守り、また歸國後、華嚴の教えを弘める土地を求めていたところ善妙は巨石に變身して寺地を定めたという。以上のような話を内容としている。

その説話の主な構成要素は、元曉繪では、(一) 唐に向う途中雨のために洞穴で泊る。そこは墓場で骸骨などが散ばり、夜の夢に鬼が出てきて二人を襲う。覺めたのち何も知らないときは安心して寝ていた場所も墓と知つた時に恐れをなした。すなわち一切のものが心によって生じ、心のほかに師を尋ねても意味がない、唯心所造の道理を悟つたこと。(二) その後、智恵並ぶものなく行徳はかり難く、因明、内明内外の典籍すべて通解し經論の疏をつくり、大會において講讀するに聽衆皆涙を流すという有様で、あるときは山水のほとりに坐禪し、禽鳥虎狼自ら屈伏するというほどの徳の高さがあつたこと、(三) その反面、巷間に留つて歌をうたい、琴を彈き、僧の律儀を忘れた如き振舞で、居士に同じく酒肆倡家に入るといふ極めて自由奔放な生活を送つたということ、(四) 王后のために金剛三昧經略疏を著したが、後の學者はこれを敬重し本論に準じて『金剛三昧論』と名づけ世間に流布したという。

義湘繪では、彼は元曉と別れ唐に入るが、(一) 托鉢して食物を乞ううち善妙という美人に出合う。善妙は「法師高く欲境を出て廣く法界を利す、清くその功德を渴仰し奉るに尙色欲の執着抑え難し、法師の貌を見奉るに我が心忽ちに動く、願くは慈悲を垂れて我が忘情を遂げしめ繪え」と

戀慕の情を告白するが、義湘は「心堅きこと石の如し」「我は佛戒をずりて身命を次にせり、淨法を授けて衆生を利す、色欲不淨の境界久しくこれを捨てたり。汝、我が功德を信じて長く我を恨むること勿れ」僧として戒と佛法のために身をすてていると答える。(二) これを聞いた善妙は悲愧懺悔し、佛法に歸依し義湘の手助けをすることを誓う。(三) 義湘は終南山の至相大師のもとで法をうけ歸國するが、善妙に別れをづけずに國に向う。これを知った善妙は贈り物を入れた箱を海に投げ入れると不思議にもそれが義湘の船にとどく。(四) 善妙自身も海に飛び込み、竜に變身し義湘の乗った船を無事新羅まで送る。五. 新羅に歸った義湘は華嚴を弘める土地を求めて巡見する。適当な山寺があったが、そこに小乘雜學の徒五百名がおり困惑していたところ、善妙が「方一里」の大磐石となってその山寺の上を飛び上下したので、僧たちは恐がって四散してしまった。義湘はその寺で華嚴宗と興隆することになり、この因縁によって浮石大師と名づけられたという。

以上が『宋高僧傳』を出典とする『華嚴宗祖師繪卷』の説話内容であるが、これによれば元曉と義湘は全く對稱的な生き方をしているといえる。元曉は86部にも及ぶ多くの著述をのこし、彼の思想は和靜とよばれるように融會(和會)思想にあるといわれる。しかし一方では『三國遺事』にあるように、彼は戒を破り瑤石宮の王女との間に薛聰を産み、世俗の服装にとりかえ自ら小姓居士と稱し、また俳優たちが舞い弄んでいる大きな瓢をまねて一つの道具を作り、名を華嚴經の「一切無碍人 一道出生死」に依據して「無碍」と名づけ、それに歌詞をつけて世上にひろめ、多くの村々を歌い踊って歩き廻り教化したという。義湘は浮石寺を創建して大乘教を傳教するや、靈感すこぶる多くあらわれ、また十の寺に教を傳え、十人の弟子がそれぞれ亞聖(聖人につぐ賢人)であったという。そして『宋高僧傳』では「海東華嚴の初祖」と號すとしている。

ところで、明恵は戒を守り女性との接觸をもたなかった出家主義に立

脚した高潔な僧であった。その彼が、女性(善妙)の繫戀を斷ち、戒を保ち海東華嚴の祖とされる義湘をとりあげたことは理解できるとしても、學者ではあつても戒を破り自由に生きた元曉をとりあげ繪傳まで作った事實はどのように理解すべきだろうか。この元曉繪、義湘繪にみる限り、嚴密な意味でのこの二人の華嚴宗の中で果たした役割や學問上の業績によって明恵がとり上げたとは思えないのである。この繪傳の出典である『宋高僧傳』での義湘傳の焦點は、善妙との出会い、發心、佛法外護の化身であり、元曉傳では彼の強烈な個性、金剛三昧經の講經による王妃の病の治癒ということであった。兩傳の説話的な部分が繪傳にとり上げられているのである。換言すれば、華嚴宗での位置づけや學問的な問題よりも、副次的な靈異、奇跡、奇異的なところに繪傳の主題があつたといえる。實はそこに高僧別傳のもつ一つの特徴があり、また劇的な、説話的な構成要素をもたざるを得ない、視覚にうったえる繪卷の限界があると思う。

四.

では、明恵は元曉・義相の靈異・奇跡・奇異のみに關心があつたのであろうか。決してそうではなく、むしろこの兩者の生き方に心をひかれ、二人の人間像は明恵の中に投影されているといえる。いま義湘とのかかわりを主にみてみよう。

明恵が一生不犯であつたことは、弟子達に語つた彼の言葉にあらわれているが、「幼少の時より貴き僧に成らん事を戀願ひしかば、一生不犯にて清淨なからん事を思ひき、然るに魔の託するにか有りけん、度々に既に婦事を犯さんとする便り有りした。不思議の妨げありて、打ちさまし打ちさまして終に志を遂げざりき」(『梅尾明恵上人傳記』下)とあるように女性からの懸想もあつたようであり、また「頭を剃れども、いよいよ其の頭きらめけるを快くし、法衣を着せるも、ますます壞色のてれるにほこる。拙き哉や。道の爲に身をやつさば、眼をもくじり、鼻をも切り、耳をもそぎ、手足をも斷ちすくすべし(中略)いよいよ形をやつして人間

を辭し、志を堅くして如來の跡を踏まん事を思う。然るに眼をくじらば、聖教を見ざる歎きあり、鼻を切らば則ち、涕涕垂りて聖教を汚さん。手を切らば、印を結ばんに煩ひあらん。耳を切ると云ふとも、聞えざるべきに非ず。然れども五根の闕けたるに似たり、去れども片輪者にならずば、猶も人の崇敬に妖されて、思わざる外に心弱き身なれば出世もしつべし云々」(『同書』上)と彼は佛道修行のために耳を切りおとしたといわれ、當時の僧が世俗的な出世を望み、また、きらびやかな法衣につつまれ、世間の崇敬をうけることは、求法の妨げになると云い切っている。

さらに明恵は善妙の夢を『夢記』に記している。すなわち承久2年(1220)5月20日の夜の夢に「明恵が十蔵房から唐より渡來の香炉をうけとる。中にはいろいろな唐物が入っており、その中に五寸ばかりの唐女の形をした焼物があり、日本に來たことを嘆いているというので、明恵がなぐさめると、人形は生身の女となった。明恵はおどろき明日他所で佛事があるのでそこへ連れていこうと考える。翌日實際行ってみると十蔵房があり、明恵が伴った女性は蛇と通じたという。明恵はそうではなく、この女性は蛇身を持ち合わせているのだと思う。…」ここで夢さめる。明恵は彼自身の解釋として、このあと「案じて曰く、此れ善妙也、云はく善妙は竜人にて又蛇身有り云々」と書き記している。これによって明恵の善妙に對する關心の深さを知ることができ、夢の中であたかも彼は義湘に比している様に思える。

また善妙の義湘にかける戀慕の情は、義湘によって昇華されて竜に化身し、大磐石と化して佛法を護ったのであるが、義湘繪の詞書に「愛に親愛・法愛有り、法愛は一向に潔し、親愛は染淨(「汚」か)に近せり、信位の凡夫は、親愛は優れ法愛は劣なり、三賢十地は、法愛は優れ親愛は劣なり、或は十地にはたた法愛のみ有り、若し愛心の事識地を所依として染汗(「汚」か)の行相に起こるをば、乖道の愛と名づく」とあって、愛には親愛と法愛があり、親愛は人間の煩惱にかかわり、法愛は清らか

なものであるといい、凡夫は親愛が多く法愛が少いが、華嚴における菩薩の階位が高くなるにつれ法愛のみになるという。そして「今、善妙はさきに有染の愛心を發すと雖も、後には無染の愛心を發せり」といい、善妙の人間の煩惱から愛心をおこし、それが高められ菩提心となったという。義湘繪の最後に「善妙、歸法の驗は圖繪に表わずに足れり、心ざしに含うめる深義は圖繪を借りるに便り無し云々」という中で、彼の善妙の行動に対する教理的説明をみることができる。

その善妙を新羅國の女神として華嚴擁護の誓あるによって勧請し、貞應3年(1224)4月25日に高山寺の別院として平岡善妙尼寺を建立し、同寺鎮守として善妙神が祀られたのである。

その他、彼が一時隱遁したところは「紀伊湯淺の栖原村白上の峯に、一字の草庵を立てて居をしむ、其の峯に大盤石左右に聳えて小さき流れ前後に出ず、彼の高巖の上に二間の草庵を構へたり、前は西海に向へり」(『傳記』上)また「上人、夢に大海の邊に大盤石さきあがりて高く聳えたり、草木・華菓鬱茂して奇麗の勝地也、大神通力を以て大海と共に相具して十町計りを抜き取りて、我が居所の傍に指し置くと見る云々」(『傳記』下)という夢などは、まさに浮石寺の遺跡を慕うものであろう。

以上みてきたように、明恵の宗教生活の中に義湘・善妙が生きているといえるであろう。元曉については、明恵が著した『光明眞言土砂勸進記』の中にみることができ、また元曉繪における元曉の姿が、成忍筆の「樹上坐禪像」の明恵に近いことが指摘され、さらに明恵は、義湘とは性格を異にしている元曉の戒を破り、風月を愛し、巷間を遊行した生活に憧憬すらもっていたことなど、明恵の内面に存在する對立的要素が指摘されているが、これらの問題は他日に申ずりたい。